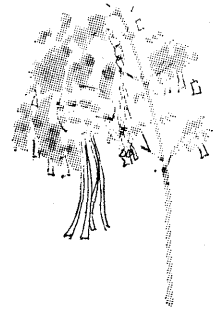


◇講演◇

## 保育の構造



津 守 真

### 保育の構造について

きょうは「保育の構造」という題をつけてみました。が、構造などといえますと論理的に組み合わせた立派な建物のようなことを連想しがちです。保育の場合では、人間と人間の集まりのことからですから、一体、そういう人間の集まりに構造というようなものがあるのかどうか、という風な疑問がもたれます。そういうことを承知の上で、あえて考えてみようというのです。

人間は、人によくわかるようにはっきりとした面を出しますと、外から見た時、はっきりしていればいるだけ、内側は混んとしたものであり無秩序なものであるという、そういう二面性をもっている。ですから、はっきりわかるように私がもしもお話を

したとすれば、本当は、はっきり割りきれないものを、むりに割りきってしまうことになりかねません。また、保育のことがらというのは、はっきり割り切れないものがたくさん中に含まれているところこそ、特色があるともいえましょう。

子どもとふれて、子どもにどうすればいいかということを考え、子どもに何を与えねばならないかを考えるのは、私どもが、何かがすっかりわかっていて、それに子どもを当てはめていくという作業ではないはず。それとは逆の発想をするものであると思います。子どもの世界、およびそこに参加するおとなを含めた保育の世界というのは、わからないものをたくさんもち、謎に包まれたものであり、その中にはすばらしい思想や芸術がいっぱい含まれているようなものじゃないかと考えています。

その一つをめぐってみると、その中によいものがたくさんかくされている、あるいは混とんとしたものの中に何かを発見するというような作業、それが保育である。丁度、土の中にダイヤモンドや金鉱がかくされていて、それを掘り当てるのにシャベルで掘り返すような、あるいは、考古学の資料がたくさん土の中にかくされていてそれを掘り返すような、そういうのが保育の仕事だとすれば、乱暴に掘り返したら、そういう材料はこわれてしまうかもしれない。丁寧に一枚一枚掘り返して、愛情をもってソッと掘り起こして、はじめて見つかるものがある。また、あるところは、大ざっぱに掘り起こしてあるところまで進んでいかないと、その下の鉱脈にいき当たらない場合もある。

何か、我々がわかっていてそれを当てはめるのが保育ではなくて、人間のわからないものの中に新しいものを、あるいはそこにあるよいものを見つけていこうというのが保育だという風に考えますと、一つ一つの保育の場面というのは、一回一回が新しく、また、一回一回が新たなものを発見する人間の働きだということができます。

こう考えてきますと、保育の構造なんていうことを考えるのは、とても大それたことで人間の手にはおえないようなしろものである、といった方がよいような気もいたしますが、それでも、あえて、もう少し進んでみます。

### 保育構造の底辺はなにか

人間の子どもを相手にして、人間であるところの保育者が、そこでいっしょにふれ合って生活をして作り上げていく、その人間の働きにはいろいろの部分を考えてみることがができます。いろいろの部分といっても、それはお互いに関連し合う部分ですけれども、頭の中で考える働き、目で見たり耳で聞いたりする働き、手でさわったりにおいをかいだりする働き、またからだを動かし自分であちこち移動する働き、こういういろいろの働きを子どももおとなもっています。その一番根底にある部分は何かという、それはからだを動かす働きであるといえるでしょう。

まだ歩けない赤ん坊の場合でも、自分で動かすことのできるからだの部分の動かす。我々の相手である幼児は、思うようにあっちに行ったりこっちに行ったり動き回ります。保育はまず、からだを動かすことが主な部分であるような仕事であると思います。頭で考えるというより先からだで考えるというようなことをいいますが、それはからだを動かして外の世界のいろいろなものに触れたり、また、からだを動かして人に触れたりすることがもたくなって、そこから抽象的な思考というものもできるからです。これは大変なことだと思えます。保育の学問がどんなに進んだとしても、抽象的な理論がつみ重ねられても、保育そのものの

が、からだを動かすことが主になって作られるんだという事実  
は、変わらないだろうと思います。

からだを動かす部分というのは私どもが余り意識しないでやる  
ことが多い。考えずに動く場合が多いのです。かけ出したり、手  
先で何かやったり。だから、保育をしている人に「きょうは何を  
しましたか」と尋ねても、余り答えられない場合が多い。からだ  
をうんと動かしていた、じゃ、頭が働いていないかというところ  
じゃない、からだを動かすことによって頭を使っていた。まあこ  
ういう点は今の僕らの生活なんてさかさまで恥ずかしい次第で、  
頭だけ使っていてからだを動かさないから本物が出てこない。子  
どもの生活がなぜおとなにとって羨しいか、またなぜ本物がある  
かというところ、からだを動かすことが主になった生活だからとい  
うことがいえるかもしれません。

そのからだを動かすということの上に、さらに、目でみたり耳  
で聞いたりするというようなことが出てきます。まあ、これはほ  
んどどこからだを動かすことと切りはなせないことなんですけれど  
も、目で見ると、耳で聞くというのは上等な方です。もっとからだ  
を動かすことと密接なのは、からだを動かす感覚、ものに触れる  
感覚、こういう原始的な感覚が目より耳より先にあります。その  
原始的な感覚が子どもにとって大変大事であるということで、こ  
れを僕らは大変重要に考えなくちゃいけないと思います。

次に、このことをちょっとぼして先へ行きますが、目で見た  
り耳で聞いたりするということの上には、頭の中で作り上げる、  
想像する、目の前に実際にはないんだけど頭の中に思い浮か  
べるといような世界があります。今、「あなたの家はどうなか  
ったかをしていきますか、あなたのうちの門を入れてから自分のへ  
やまで行くのはどんな様子ですか」なんて尋ねられたら、簡単に  
目の中にそれを思い浮かべることができる。こういうのを視覚表  
象などといったりしますが、思い浮かべる世界というのは、目や  
耳で思い浮かべるよりもっと前に、からだの感覚を使う表象があ  
ります。表象などとむずかしい言葉ですが一応使っておきます。

子どもが運動会のことを思い浮かべる時には、子どもはまぶた  
の中に目に見える如く思い浮かべるのではない。遠足のことを思  
い浮かべる時もそうです。おとなはどちらかというとそれが先に  
なってしまうて「遠足の絵を描きましょう。運動会の絵を描きま  
しょう」などというと、すぐその時のありさま、光景が目の前に  
浮かびます。

ところで、こういうことを考えてみたらしょう。水泳を  
する時、いかにからだを動かすかを思い浮かべてみましょう。そ  
の時我々が思い浮かべるのは、自分が泳いでいる姿なんかじゃな  
いんです。泳ぐ時に手を動かすその手の感覚、それから足を動か  
すその足の感覚、手と足をうまく調子を合わせる感覚、そういう

いわばコツというようなものを思い浮かべます。

我々の体験の上でもそのようなのですから、子どもの思い浮かべる世界というのは、どうやら視覚や聴覚の表象よりも先に、運動感覚や触感覚の表象の方が先ではないかということが考えられます。だから、運動会の絵を描いた時に、子どもが描くのは、もしも本当に思うように描けるとするならば、目で見た行動よりもっとほかのものが出てもしばしばです。その時からだが受けた感動、からだで受けた印象というものが、もっと生のもが出てきているはずだし、また、そういうものを出す場合がしばしばあるんじゃないかと思います。

今、一番人間としての下の段階になる部分として、からだを動かすこと、それに伴う表象というようなことを述べました。さらにまた、外の世界に人が触れた時に、目で見たり耳で聞いたりする以前に、人間が自分の感覚を自分で感じるという世界があります。発達のいうと、赤ん坊の段階や、やや発達のおくれた子どもの幼児の段階というのがそれです。たとえば、赤ん坊がオッパイを吸う時は、お乳を吸う口感覚というものを楽しんでいるけれども、哺乳びんとかお母さんのオッパイというものの認識はないわけです。つまり、外の世界を認識する前に、自分自身がそれにふれて感覚の楽しさを感じるわけです。おとなでも多分にそんなことはあるのですが、おとなはもういろいろなことがたくさ

ん押しよせてきていますから、その部分はほとんどかくれてしまっています。

だから、小さい子どもには、自分が理解できないようなものがたくさん、目の前を動いている時、たとえばデパートなどで大勢の人がゴチャゴチャ動いていて、しかも子どもはそれらの人の腰より低い部分をウロウロしているような時、人間が動いているなんて印象じゃなくて、何かこう巨大なものがいたりきたりしている、あるいは目の前を光や影がいたりきたりしているようにうつるにちがいない。いわば、そういう風な世界というのが子どもを感じる世界です。

そういうものの中から、だんだんに外の世界が見てとれる、聞いてとれるようになってくるわけです。で、その時に、外の世界を知るには、目を通したり耳を通して、感覚器官を通して知るんですけども、子どもがそれを知る時には、そのものにふれて新鮮な感動があるわけです。というのは、おとながそれを知る時には、目で見たものを目で見たままに感じるよりも、それを我々の知識というもののあみの目を通すわけです。そうやって意味づけしたりして見る。子どもを見た時、この子は精薄児だと見る、この子は自閉症、この子は正常児、この子はIQの高い天才児だというように見る。こういう例を思い浮かべると大変はつきりするでしょう。

我々の中にこういう知識があつて子どもを見ると、子どもをそのままずっとみるんじゃなくて、子どもがこうだこうだといつてそういうひきだしを自分の中にもつていて、そこに入れていくのが外の世界を知覚する仕方です。子どもはそういうひきだしがありませんから、あつたとしても、それは非常ににもにやみにやした袋みたいなものですから、はつきりとは区別しません。そのものを、自分の心に感ずるままに、すつと受けとめます。というのは、私どもの知識とか、意識してもっている壁をつき通して、もう一つの奥の世界でもう一つ奥の心の部分で、それを受けとめているということにもなります。

だから、おとなはよほど自分のからを打ちこわしてかかる必要があるわけです。それが大変な作業で、我々は教育によって何かを作り上げることが非常に大事のように思っていますけれども、自分自身について考えるならば、自分の中に作られた余分のものを打ちこわして、ものにふれたそのものをそのものとしてすつと受けるようにする、ということにうんと力を使ってしまふわけです。まあ、若い方はそれほどでもないけれども、段々年を経るとそれが大きくなるのです。

さて、その心の一番奥のところで受けとめて感動することのできる世界というものを耕しておくことが必要であつて、人間みんなそれをもっているんだけれども、いろいろのもので邪魔されて

いて、それが出てこないことがたくさんある。こういう現実をしょつて、子どもとおとながいっしょになっているのが保育の場なのです。

### 本質的体験

もう一度、今のところにもどつて考えてみましょう。まず、おとなの方から考えてみます。保育者であるおとなが、子どもを見たり聞いたり、それに触れたりする時に、いや、保育者であるというのはちよつと抜きにしましょう。単に「おとなである」とだけしておきましょう。おとなが外の世界にふれたりする時に、まず我々の一番上の層が意識して作り上げた知識の世界、あるいは一生けんめいに考えて分類する世界というようなものがあります。この世界をずっと奥の方に入っていくと、ものに触れて卒直に感動する世界がある。その卒直に感動する世界つてものを、私は、きょうはそれについて一生けんめい話したいと思つていますが、どうも十分に説明しきれない。皆さんにも研究していただかないといけません。たとえば、人にふれた時にあいさつしたり、日常の会話をかわしたりいうことでふれたといつてすましてしまう場合もあります。もっと深くふれようとする場合、そこで、その人との間に火花が散るような、そういう情熱というものが出てきます。そういう情熱にふれると、その人に本当にふれ

たというような感動を受けるものです。

保育をする場合にも、保育者と子どもが通りいっぺんの、いわば、職業意識の程度でふれている場合と、それから、その子どもに全身を投げかけ、子どもも先生に対して本当に信頼してぶつかり合って、そこに人と人とのふれ合いが、火花の出るようなふれ合いがあると、それは見えていても感動するし、保育している本人も子どもも、そこに見かけの人間をこえて、これが人間の本質というか人間の最も大事な部分だということを感じるような、そういうふれ合いが出てくるんじゃないか。それが出てくると、そういうところで人がぶつかる、その人というものが「わかった」といえる体験になる。

そこにあるから、余り興味もないけれどもいじっている、というのと、そのものに引きつけられてそのものの中に入りこみ、自分がそのものなんだか、そのものが自分なんだかわからないくらいその中にひたり込んでしまった場合、そのものは我々にとって違った意味をもってくる。そうすると、そのものがわかってくる。恐る恐る遠くからふれている場合は、恐ろしい世界であったり、自分には歯が立たなかったり、劣等感をもちそうなものであったりする同じものが、一度自分がそれにとらわれて、そのことに時間を使いエネルギーも使った時には、そのものにずっと入りこんでしまう。子どもが夢中になって砂場をやるように、子ども

が本当に熱中して粘土をやるように、表面の世界からずーっと奥に入りこんでいて、誰かが声をかけても気がつかない、友人関係なんかははねのけてしまいい、自分とものとの間で対話をしていて、その奥の方のずーっと深いところに入っている。それは、知能とか理性とかの一番根底にふれているのかもしれない。うんと静かな世界かもしれない。そういう中に、ともかく入りこんでいるのです。

不思議なことに最初のうんと原始的な時代というのは、泥をこねたり粘土をこねたりすることと関係が深い。歴史的にみても土器や陶器をこねたりというような土いじりの世界が古くからあります。手でいじくる、手と土とが主調になる世界は大事な世界です。

それから、文化的なことについていえば、こういうことをしなければならぬ、こうすべきである、というような倫理感でもって文化にふれているような時、道徳・宗教・倫理などは我々をしるものであったり、あるいは反発感を起こすものであったり、あるいは、それを自分のものにすることによって自分が優越感をもつものであったりするのですが、それをつき抜けてもう一つ下にいくとそうじゃなくなってくる。たとえば、我々が小さい時に学んだ「堤防に腕をつっ込んでオランダを洪水から救った少年の話」など、こういうものにふれた時に、我々は道徳的なおそれや

精神というものに気づかされる。それは子どもにもあるので、本当に自分が可愛がっていたものが死んでハッとした時、それからお話の中で心をハッと打たれた時、あるいは音楽なんてものは割とそうですね。本物の精神にふれた時、我々の気持ちがあぐつと高まって、人間の肉体というもののからむしろ超越しちゃって、空の中にでもふきつけられるような昂揚した感情をもったりします。

音楽のことにちょっとふれましたが、それに似たような子どもの遊びの体験というと「鬼ごっこ」あるいは「かけっこ」のようなものは、それに近いかなと思います。「鬼ごっこ」の面白いなところはルールを守るなんでもないですね。どうも近ごろの指導要領は「鬼ごっこ」をやっているんだか、ルールを守るためのしつけをやっているんだかどっちかわからないような気がして、私は大変おかしいと思うんですが。「鬼ごっこ」の面白いなところは、子どもが力一杯かけ出して、もうくたくたになるまでかけて、そしてかけ出すことは自分の体のわきを風がヒューッと通りすぎる感覚であり、それは聴覚的なものでもあるわけです。で、もうこれ以上かけられないところまで来て、鬼につかまってしまう。そういうところに「鬼ごっこ」の面白さがあるんだけれども、「丸鬼」だの「陣鬼」だの、誰がずるしたのどうのと、そういうことにとらわれてしまうと「鬼ごっこ」の根本が抜けてしまう。

そこで私どもは、そのものの子どもにとっての、うんと心の奥底に深く入った、一番の本質にぶつかるようなところで、子どもの姿を見なければならぬと思うし、そこに教育の根源をみつけていかねばならないし、その世界を養うことによって、子どもが感動する心を養うことができるんじゃないかと思います。

いろんな活動があつて、子どもは、おとなだってそうですが、ある時、フーッと気をぬいて休みます。休んだところの一番の極限は、極限という言葉は余りよくないですね、ずーっと休んでいるとそのうち自然に眠ったりします。これは人間にとって一番根本的なところで、一日活動していれば眠くなるのは当たり前ですね。それは休息であり沈黙であるわけで、そういう時はいやおうなしに人間にやってくる。子どもにとっても、そういう静かな休みの谷も、ある心の深い所の重要な部分になってくるでしょう。

そして、こういうところが、子どもの心の奥にあって、子どもは外の世界にふれているんだけれども、それは決して目に見えているものを見ているんでもないし、耳で聞く世界でもない。やはりそれは子どもの心でもって見る世界、心でふれる世界が子どもを包んでいる世界です。だから、幼稚園の先生なんてのを私の記憶で思い返してみると、その先生が年をとってたとか若かったとか、どんな顔をしてたとかまるきり覚えていない。ただその先生が自分のそばに寄ってきた時の、何かしらあたたかい感じとか、

その先生がいなくて何か物足りなくてたえぎヨロキヨロしてさ  
がしに行ったとか、そんな記憶がたくさんあるのです。

また、新しい先生が何だかキビキビしていて近よりにくくて、  
別のクラスの先生のそばに行っちゃったなんて記憶もあります。

子どもの時代ってのは、外の世界を見ているというよりは、その  
世界の一番本質的な大事な部分が子どもに届いている。むしろ、  
子どもは自分の心の世界から外の世界を見ているといえるかもしれ  
ません。保育の世界はいろんなことがゴチャゴチャある世界で  
すけれども、子どもと保育者の間に心の世界ができていくところ  
に、外からではわからない人間の本当の世界があるのでしょう。

子どもは、そうやって外の世界を体験しながら、丁度おとな  
が、一体保育ってどういうことなんだろうとか、あるいは人生と  
は何だろうとか、疑問をもってさがし求めるのと同じように、子  
どもは子どもなりの世界で本当に自分の世界で何ものかをさがし  
求めてさまよっている。そしてある時はこれを、ある時はあれを  
みつねながらさまよい続ける。そして自分の存在の中心点をみつ  
けると、そこで子どもが一步前進して、次の段階にとび越えてい  
くんです。これが発達だろうと思う。精神の発達です。

そして、その時には子ども自身が、外の世界に向かってぐんと  
一步足をふみ出して、からを破って上の世界に行くのです。もっ  
と平たくいえば、今までは一人でしか遊べなかった、いや、一人

でなら遊ぶことができた子どもが、新たに友達の世界に目が開け  
て、そこから友だちの世界に入っていく。そこでまたわからない  
ことができ、何かにぶつかり、またさがし求め、ぶつかって前進  
して、今度は文字の世界にぶつかったり、体育の世界、あるいは  
知識の世界にぶつかっていく。こうやって、常にもぶつかっては破  
れ、ぶつかりぶつかりしてさまよい求め、あるところでわかると  
前進してまたさまよって、こういう風にして子どもは成長してい  
くのです。このことはおとなだって本当は同じでしょう。

そんな子どもの世界で、子どもが困った時、おとなもいっしょ  
に困ってあげる。子どもが本心に「あ、そうだ」とわかった時、  
おとなもいっしょになって「あ、そうだったね」と喜んであげ  
る。そういうおとながそばにいることによって、子どもはそのこ  
とを自分でまた新たに確認し、「これでよかったんだ。これで自  
分の生活をもう一步進めていけるんだ」ということがわかる。そ  
して、安心して一步先にいける。保育者というのはそういう位置  
づけであり、そういう役割を果たして子どもの中にいるのではな  
いでしょうか。

今ここでは、保育の場における人間としての子どもとおとな  
を、抽象的な形で考えてみたわけです。ものとか文化とかについ  
ても多少ふれましたが、そういう面はあらためて、もう少し深く  
考えてみる必要があります。

(現職研究講義より)